

ご満堂と道祖神

昔、岡の村の街道は、小僧道ともいわれた山陰麓を通り、観音様の所から影沼下をへて、九左門屋敷うらの山裾から土橋のサダ山にっうじていた。

そして北の入り口からお熊ん堂、薬師様、稻荷様、ご満堂、両頭ん堂、観音様、お荷渡り様などの神様、仏様が街道すじにあつて、お参りの村人や旅人が切れることなく行き来していた。

ある時、二十歳くらいの若い尼さまがご満堂の愛染明王の前に正座して、半時(1時間)ばかり、涙をながしながら、熱心に祈祷していた。

道ゆく人たちは、その美しい声音にうっとりして、尼さまが南の方へ立ち去るのをみた。ところが、半町(五十メートル)ほど歩いたかという時、この尼様急に苦しみだして倒れたのだった。別当の新左衛門が医者を呼んだが手当ても甲斐なく、尼様は息をひきとってしまった。

村人は噂した。「恋しい男性と添えなくて、尼となり諸国を旅して、愛染明王をみて運命を嘆いたのにちがいない」と。

そして村人は尼様を手厚く葬り、塚を盛り道祖神をたて供養した。

今、道祖神はリング畑のかたすみにひっそりと立っている。